中経論壇

経営支援NPOクラブ監事
中谷　兼武

日本の安全感覚に疑問

過剰な歩道の安全柵

約40年のモノづくりを卒業して、少しでも地域のお役に立てればと、小学校下校時の見守りボランティアを続けている。その見守りで安全対策について考えさせられた。

小学校に面して、高さ20㌢、幅1・5㍍の歩道を備えた全幅9㍍、制限速度30㌔の生活道路があり、理想的な環境である。今年、その歩道に高さ1㍍の柵が設置されたのである。歩道が狭くなった感じで、学童の下校姿が、従来の横3人が2人になり、歩道自体にも圧迫感を与えている。この街に住んで40年弱になるが、今まで生活道路での事故は聞いたことがない。自分の不注意で、歩道から車道へ踏み外しけがをした人が、自治体等へ苦言を呈し、無駄と思われる柵が設置されたようである。

現役時代、社の最重要課題は安全第一であり、労働災害を起こさないことであった。危険個所の安全諸施策に加えて、従業員の安全に対する啓蒙と危険予知能力向上に苦心したものである。しかし、いかに物理的に安全諸施策を行っても、不慮の事故は発生するものである。重要なのは、危険予知能力をいかに高めるかである。

今回のような過剰な安全施策は、我々の危険予知能力の向上を阻害する懸念もある。この能力は、幼少時から「怖かった」等の経験に比例して身につき、そして注意力が発達し、災害に対する認識も変わるものである。不注意によりけがをするのは自己責任で、行政の責任とは考えない大人になるだろう。

以前、米国旅行時、我国に比べて、米の自動車道のガードレールが桁違に少ないのに驚いた。米ではガードレール設置の主目的は、死を伴う車の転落防止であり、道路からの逸脱防止には重きを置いていないからだろう。我国に比べて、運転手の自己責任をより重視しているのかもしれない。欧米では交通信号で自動車が来なければ歩道を渡る人が見られる。日本ではよいことではないが、彼らにおいては、自己責任と危険予知に基づく行動なのだろう。

また、最近、我家の近くの子供公園から、スリルを楽しめる遊具が撤去された。孫に付き添い公園に行った時の、スリルに得意満面になっている孫の顔が、昨日のように浮かぶ。幼児時代からスリルを楽しむ事は、危険予知能力向上に役立つと思うのだが、危ないとの訴えから遊具が撤去されてしまったのは残念である。

下校見守りの歩道における過剰な安全柵や、子供公園からの遊具の撤去を見て、改めて日本における安全感覚に疑問を感じた。ただし、視力障害者や不自由な方々への安全諸施策はもっと進めるべきなのは言うまでもない。